幼稚園の意義と教師の資格

L・W・ベンナー
津守　真　訳

今回はまず、子どもを幼稚園に送る理由から考えてみることにいたします。そもそも幼稚園は、家庭教育の不足を補うものではありますが、それにとって代るものではありません。家庭でなければ与えられないものがあると同様に、幼稚園では家庭で与えることの出来ないものを与えることができます。中でも重要なものは、集団生活に参加することであります。子どもは幼稚園に通うことによって集団生活に参加し、それによっていろいろな経験を積んでいきます。

1、同年令の子どもと遊ぶ経験。

2、自分より力のある人をうけ入れる経験。

すなわち、成人、目上の人、えらい人を敬意をもってうけ入れることは、社会のいろいろなところで経験しなければなりません。子どもたちは幼稚園の先生に接することによって、このような態度を育てていくことが出来ます。

3、系統的に、そしてまた偶然の機会に学習する経験をもつこと。

系統的にというのは、幼稚園ではカリキュラムがあり、プランがあるからです。偶然の機会にというのは、あらかじめ計画していないのに、子どもにとっては、よい学習の機会が豊富にあるからです。

そしてこの経験は次のことを可能にいたします。

4、子どもの生活に規則をもたせることが出来る。

更に、

5、次にくる小学校生活の快い手引となる。

子どもは幼稚園に通うことによって幼稚園でこそ味わえるような楽しい暮しをいたします。時には、「できるだけ長く自分のひざの上においておこう」と言う両親をみかけますが、それでは、親が、子どもの幸福な楽しい生活を奪ってしまう結果になるのです。音をたて、歌をうたい、庭で遊ぶ——何と楽しい生活でしょう。このようにして幼稚園で楽しく暮すことは、やがておとずれる小学校生活の、この上もないよい手引です。

6、家庭で与えることの出来ない材料を与える。

子どものための遊具をみますと、たとえ各家庭で与えることが出来たとしても、子どもは大きくなるので、すぐに使えなくなってしまいます。けれども、幼稚園では、同じものを毎年違う子どもに与えていくことが出来ます。また、幼稚園には、子どもが自由にかけ廻ることのできる遊び場所があります。日本では必ずしもそうではありませんが、ニューヨークをはじめ、合衆国の多くの都市では、全く遊びの空間がないのです。それでも幼稚園にくれば自由に遊べるへやがあるのです。

7、幼稚園に行けば、訓練された先生によって指導をうけることが出来る。

家庭では、どこの家でもいきとどいた指導をするということはなかなかむずかしいことです。ですから幼稚園の先生になるのには、その期待にそうべく、自ら、教師としての態度を養うべきでしょう。

そのためには、幼稚園教師の誰もが最小限、理解しておかなければならないことがあります。これはたいへん重要な問題ですが、ごく平均なみの子どもを頭において、次の四つの点をあげることが出来ます。

1、子どもたちの成長・発達には規則と順序があるということ。

これはすべての先生の最低必要な知識です。

2、普通の子どもは、どれくらいのことを学習する能力をもっているかということ。

私どもは、子どもたちにその能力を越えたむずかしいことを与えてはなりません。また、やさしすぎるのも妥当でありません。発達を助けるような適切な程度を是非つかんでおきたいものです。

3、子どもの学習は「遊び」を通しておこなわれるのだということ。

子どもたちが幼稚園から帰ってくると、よく母親との間に「お前、きょうは何を勉強してきたの」「何にも勉強してこないよ」などという会話が交されます。けれども幼児においては遊びの中で社会生活に必要なことを会得していくのですから、あわてることはありません。

4、子どもたちは、個人差が大きいということ。

したがってすべての子どもに同じことを同じときに与えるということは不可能です。以前、私は、同じ服を着て同じような顔をした一卵性双生児の興味が、一方は機械的な事柄に、一方は絵や音楽にむけられていたというお話をしたことがございました（五十七巻第六号）。このような個人による違いを私たちはみつめなければなりません。

もう一つ、よい幼稚園教師に必要な特質をあげましょう。

幼児の時代は、周囲のものから強い印象をうけます。ですから殊に、子どもと一しょにいる先生は重要な存在です。先生がどういうふうに行動し考えるかということは大切なことですが、それのみでなく子どもたちはそれをまねします。それ故、幼稚園の先生は子どもによいお手本を示す人でなければなりません。かつて私が幼稚園の先生をしていたときのことです。ここでは、人に何かたのむときにはいつも「プリーズ」と言うようにさせておりました。幼稚園でそういう習慣にしておくと、子どもは家にかえって家の人がそれを言い忘れたりすると、子どもがおとなに注意をすることもあります。こんなことにも、あなたがたのすることが反映していきます。

幼稚園の先生は、他人とうまく折り合っていくことができる人でなければなりません。先生と子どもが、いつも親しい関係を保つていくことは申すまでもありませんが、それのみでなく、先生はしばしば家庭の人とつき合わねばならないからです。

先生は、いかにして自分自身の感情を統御するか、ということを知っている人でなければなりません。先生自身が、おちついた、安定した情緒生活のできるとき、子どもも自分の感情を押さえていくことが出来るのです。

先生はまた、責任感の強い、信頼のおける人柄でなければなりません。

公平で、人を偏りみないということも大切です。すべての子どもは違っていますから、違うようにみなければならないのですが、平等に扱わなければなりません。

非常に忍耐強い人でなければ、真によい先生にはなれません。実習生たちが幼稚園で保育をいたしますと、「あーあ、本当にく

たびれてしまった」と申します。しかし、これを自分の仕事として毎日おこなうのですから、大きな忍耐をもつ人でなければなりません。

最後に申しあげたいことは、先生というものは、外からも快くみえる人、礼儀正しい人、そしてよく振舞える人であってほしいと思います。美人ということではありません。心がよければ美しくみえるものですから。

子どもたちは先生ゆえに学び同時に先生について観察しています。まだ社会的に十分成長しておりませんから、感じたことをことばでは表しません。けれどもとてもよく気をつけ、感じ、意識しているものです。

私のへやは窓からのぞくことが出来るようになっておりました。ある子どもが

「おいみんな、先生はきのう着ていた服と同じ服を着ているよ」

と言いました。たしかに同じ服を着ておりましたが、私は自分では少しも気づきませんでした。子どもたちはきのうの先生を覚えていたのでした。

また、ある会合に出席するために、私は、おめかしをして羽根のついた帽子をかぶっておりました。ある子どもに道で会ったので、サヨナラをしました。そのとき

「先生、その帽子はどこで買ったの？　ばかみたいな帽子だね」

と言いました。帽子をみているなどと思わなかったのですが。翌朝その子どもは登園すると「おはよう」も言わないで庭へ遊びにとび出していきました。そして通りぎわに

「先生、ゆうべ髪を洗ったんだね」

と言いました。

こんなことがあるのが幼稚園の先生の生活です。よくお母さんたちは

「うちの子どもは幼稚園から帰ると、何をしてきたのかはちっとも言わないが、先生がどんな服を着ていたかということだけは毎日ちゃんと言うのですよ」とおっしゃいます。これは決して子どもたちが幼稚園をないがしろにしている、ということでお話したのではありません。先生がどのように振舞うか、どのように子どもに接しているかということが非常に重要だということを話したわけです。

皆さまがたがよき先生として、心から満足し、すばらしい時を送れますように願っております。

（米国、マウント・ホリヨーク大学教授
一九五八年二月―八月お茶の水女子大学児童学科講師）